

中国における日本語音声教育の 現状と課題

—復旦大学日本語学科の取組みから—

劉 佳琦¹

要 旨

本論文ではまず近年の中国における日本語音声教育の現状および教師・学習者のニーズについて述べた。次に復旦大学日本語学科における音声教育の取組みについて、「日語語音学」というコースの到達目標、内容、方法、教材開発について報告した。本コースは、1) 母語との差異の理解、2) 発音の学習方法の指導、3) 発音のモニター力の育成の3点を考慮しデザインをした。コース終了時にアンケート調査を実施した結果、このコースを通して学んだことについて「自然な発音」(85.5%)、「発音の学習方法」(70.1%)、「音響分析ソフトの利用方法」(68.0%)という回答が上位を占めていることがわかった。さらにそれを踏まえて、中国における日本語音声教育が抱えている課題について、計画的かつ継続的な音声指導の実施および教師養成の必要性を訴えた。最後に、中国において日本語音声教育がさらに発展していく可能性について述べた。

キーワード

中国の日本語音声教育 学習ニーズ 発音指導 教材開発

1. はじめに

筆者は中国の高等教育機関において初中級日本語教育に携わり、音声教育の欠如を痛感していた。これまで中国国内のいろいろな研究会や勉強会で音声教育について聞いてきた。学習者からは「発音を教えてほしい」、「先生に発音を指摘してほしい」、「日本人と同じような発音で話したい」といったコメントが多く、学習ニーズの高さが窺える。しかし一方、教師からは「教材が少ない」、「指導方法がよくわからない」、「発音を教える自信がない」などの声が多い。実際の教育現場を参与観察すると、学習者の発話を聞いて気づいたときだけリピートさせたり、注意を促したりしている光景をよく見る。発音の指導は教師個人の裁量に任せられ、ある意味非常に場当たりに実施されていて、体系的、計画的、継続的な音声教育が行なわれているとは言い難い。

本論文ではまず中国における日本語音声教育の現状について述べる。次に、復旦大学で実施されている音声教育の到達目標、授業内容、指導方法について紹介する。コースに関

わる教材開発およびアンケート調査の結果についても報告する。最後に、それらの実践を踏まえて、中国における日本語音声教育の課題および今後の可能性を述べる。

2. 中国における日本語音声教育の現状

中国における日本語教育は、語彙や文法より音声の教育の遅れが知られている（崔1992）。しかし、だからといってまったく音声に関心が寄せられていないのかと言えばそうではなく、日本語でコミュニケーションをスムーズに行なうために、音声の果たす役割が重要視され、音声教育に焦点が当てられるようになってきている。中国における日本語音声教育の現状について、劉（2011、2012）の調査結果では、近年日本語音声教育は重視されるようになってきていることがわかった。「音声教育が必要か」という質問に対して、協力者全員が「必要である」と答えている。しかし、発音の指導期間が短い、音声教材が少ない、発音指導方法が単調であるなどの問題が存在しており、指導は「発話中に気づいた発音の誤りをその都度訂正する」程度に留まり、体系的かつ計画的に指導を行なっている教育機関が少ない。以下では日本語音声教育における学習者および教師のニーズ、中国で市販されている日本語音声教材について具体的に述べる。

2.1 学習者および教師のニーズ

日本語音声教育は、時間および指導法に関する情報や理解の不十分さなどの諸事情により、十分に行なわれていないのが現状である。しかしながら、発音指導を望んでいる日本語学習者は少なくない。

劉（2011）は、上海の三つの大学で日本語を専攻している学習者68名を対象に、発音に対する学習ニーズ調査を実施した。その結果、「正確な発音を勉強したい」、「自然な発音で日本語を話したい」など、発音についてもっと勉強したいというコメントが最も多く、学習ニーズが高いことがわかった。また、学習者が音声上の問題点について清濁（27.2%）に次いで、アクセント（24.3%）、イントネーション（18.4%）などの韻律上の問題も自己認識していることがわかった。特に新出単語リストに書かれている動詞終止形のアクセントと、文章中の活用形のアクセントとの違いを疑問に思い、苦手意識を持っている学習者が多い。このことについて「教師に指導してほしい」、「文章中のアクセントの変化も説明してほしい」などの学習者のコメントがあった。そのため、学習者の要望に応えられる発音指導を実施し、発音の学習、特に苦手とされている項目の学習への支援をしなければならないと考えられる。

また、劉（2012）で実施した教師対象の実態調査では、音声教育が必要であると考え、学生の発音上の問題点を認識しているという面においては、教師協力者全員に共通していることがわかった。またインタビューでは、学生の発音を注意深く聴き、発音の指摘・訂正を常に行なっていると答えている。しかし、発音指導の実施にあたって、カリキュラムの制限²、教材の不備などの問題が存在していると述べている。また、発音以外の学習項目や内容も多く、授業中に発音の指導に多くの時間をかけることは実質的に困難で、発音の授業や学習者の自律学習に任せているケースも多いことがわかった。

日本語音声教育の現状から、学習者の発音学習に対するニーズが高いにも関わらず、教師自身の発音指導に対する苦手意識やカリキュラムの制限などにより、学習者が発音指導を十分に受けられないことがわかった。そのため、カリキュラムの制限がある中で、学習者のニーズに応えられる効率的な発音指導を実現するためには、科学的なアプローチによる実証研究に基づいて、指導法の改善や教材の充実を検討する必要がある。

2.2 日本語音声教材

中国で市販されている日本語の発音に特化した教科書の種類は数が限られている(図1)。翟冬娜・林洪(2000)《日语发音与纠音》、赵秀娟(2003)《掌握日语发音》、由志慎(2006)《标准日语发音》、谢为集(2006)《日语的发音与声调》、张升余・南海(2007)《零起点掌握标准日本語发音》、段育文(2008)《日语发音全解》、凌蓉(2009)《日语语音教程》がある。これらの教科書は日本語の音韻規則を紹介し、聞き取りや朗読を練習項目としていて、日本語音声教材の空白を埋めてきた。しかし、近年の音声研究および教育研究の分野で培ってきた成果が音声教材に生かされているかどうかという点に関しては、まだ改善の余地があるように思う。そんな中、2010年に『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』(戸田貴子著)の中国語版である《让你沟通自如的日语发音课本》(図1)が中国国内で市販された。母語別指導や活動型授業スタイルの提案など、まさに中国の日本語音声教材に吹き抜ける新風と言えよう。今回の復旦大学でのコース開設にあたっては、最新の習得研究と教育実践研究成果も視野に入れた中国語母語話者向けの教材開発を進めている(詳しくは本稿3.3を参照されたい)。



図1 中国市販の日本語音声教材

3. 復旦大学における日本語音声教育の取組み

復旦大学では、2010年に日本語学科の2年生を対象に『日語語音学』(発音コース)を新設した。中国においてはこのような発音に特化したコースはまだ数が少なく、注目されている。日本語の学習環境も対象となる学習者も、日本国内の留学生対象コースとは異なるため、指導の際に考えること、対処しなければならないことも違ってくる。そのため、

事前アンケートを通して、学習者のニーズと発音に対する自己認識を把握しておいた。そして、学習者各自に学習の目標を立ててもらった。また、コースをデザインする際に、主に以下の3点を考慮した。1) 母語との差異に重点を置く、2) 発音方法と発音の学習方法を指導する、3) 発音のモニター力を育てる。以下では、コースの到達目標、内容および教材開発、コース後アンケートの結果について述べる。

3.1 コースの到達目標

「日語語音学」の到達目標は以下のように考える。1) 母語との違いを理解したうえで、日本語の発音の上達を目指す。2) 発音練習とともに、今後も継続的に学習していけるように発音の学習方法も身につける。3) 音韻知識を持って、自分と他人の発音を意識的に聞くことができるようになる。

3.2 コース内容

コースを開設して3年、履修生は延べ60名である。授業対象は復旦大学日本語学科の2年生で、学習歴は1年半である。全コースは17週、週に1回授業を行なう。シラバスは表1のとおりである。

表1 「日語語音学」のシラバス

第1週	音声学の概念、授業概要の紹介
第2週	母音の特徴、母音無声化、半母音、母音の交替
第3週	子音(1) ——子音の分類と特徴、中国語の子音と比較
第4週	子音(2) ——有声音と無声音、中国語の有気・無気音と比較、鼻濁音
第5週	子音(3) ——短拗音と長拗音
第6週	リズム(1) ——拍、特殊拍、長音と短音
第7週	リズム(2) ——促音と非促音、撥音と非撥音
第8週	リズム(3) ——フット(語短縮、数字と曜日の言い方、語呂合わせ)
第9週	アクセント(1) ——基本概念、中国語の声調と比較、アクセント辞典
第10週	アクセント(2) ——いろいろな品詞のアクセント(名詞、動詞、形容詞)
第11週	アクセント(3) ——アクセントの視覚化(Praatを使った実習)
第12週	アクセント(4) ——文中におけるアクセントの変化
第13週	外来語の音声特徴
第14週	イントネーション(1) ——文中イントネーションの「大ヤマ」と「小階段」
第15週	イントネーション(2) ——フォーカスとポーズ、中国語との比較
第16週	イントネーション(3) ——文末イントネーション、終助詞のイントネーション
第17週	スピーチ大会、レポート提出

「日語語音学」は表1の内容を軸として毎週音声指導を行なっている。そのほかに、以下のような工夫をしている。

3.2.1 母語・母方言を考慮した発音指導

このコースでは、これまでの音声習得研究の成果を踏まえて、学習者の母語と母方言の音韻体系を考えた指導を行なっている。ここでは、その実例として日本語の有声・無声破

裂音 /b//d//g/ と /p//t//k/ の指導案を紹介する。中国人日本語学習者の場合は有声・無声破裂音の混同が多発すると言われている。また、学習者の母方言によって混同の実態が異なることも先行研究で明らかになっている（劉 2005）。Major and Kim（1996）により提唱された **Similarity Different Rate Hypothesis**（SDRH 仮説）では、目標言語を習得する時、母語と類似している項目より、類似していない項目のほうが習得が早いという。類似している項目のほうが混同しやすく、習得が遅れる可能性があるという考え方である。中国語話者における日本語の有声・無声破裂音の混同はまさにその裏付けである。そのため、指導の際に、母語である中国語と日本語の音韻体系の差異をきちんと理解してもらう必要がある。中国共通語の破裂音の場合は「他」と「搭」のような有気と無気の対立であるが、日本語の場合は「た」と「だ」のように無声と有声の対立である。つまり、中国共通語には特殊な音声環境を除いては、無声破裂音しか存在していない。日本語「だ」のような有声破裂音を新たな音として学習する必要がある。本コースでは復旦大学に在籍する中国の様々な地方出身の学生を対象としているため、教師が正確な音韻知識に基づいて、学習者に以上のような解説をしている。そうすることで、母語と目標言語の差異を整理することができる。それだけでなく、日本語の有声破裂音の生成を助けるために、具体的な発音の練習方法を示す必要もある。本コースでは、以下の3つの発音方法を学習者に提示している。1) 身体の弛緩を利用した方法、2) 鼻音を利用した方法、3) 中国の方言³を利用した方法で、詳細は以下のとおりである。

— 有声破裂音の発音方法 其の1 —

身体の弛緩を利用した練習方法です。全身の力を抜いて、ため息をつきながら、「だ～め～だ」とできるだけ長く伸ばすように言ってみてください。それから、「だめだ」と段々短くして言ってください。そうすると、日本語の有声破裂音「だ」の発音ができるようになります。

川口（2008:127）より引用した。

— 有声破裂音の発音方法 其の2 —

鼻音を利用した練習方法です。最初に日本語の「ん」を長く伸ばすように発音してみてください。何回か言ってみた後で「だ」をつけて、「んだんだんだ」と繰り返して発音してみます。それから「ん」を徐々に短くしていきます。最後に「ん」がほとんど聞こえなくなり、日本語の有声破裂音「だ」の発音だけが残るようにします。

— 有声破裂音の発音方法 其の3 —

中国の方言を利用した練習方法です。ただし、適用者は上海方言話者に限ります。日本語の「だ」を発音する時、上海方言の「洗浴」の「洗」の発音を思い出して下さい。その子音の発音は「だ」と似ていますので、同じように発音してもかまいません。

以上は日本語の有声・無声破裂音の指導案であるが、ほかにリズムやアクセントの指導においても母語との比較を積極的に取り入れている。目標言語の音韻規則を習得する際に、学習者は自ずと母語と目標言語とを照らし合わせていると思われる。このように教師は学習者の脳裏にある考えを表に引き出して、習得が促されるように導かなければならない。

3.2.2 発音の学習方法の指導と実践

このコースでは、発音指導だけでなく、発音の学習・練習方法も重要な項目として指導と実践を行なっている。学習者と教師を対象としたアンケートとインタビューの結果からもわかるように、音声教育においては、教師のほうでモデル音声を提示し、学習者にリピートさせるという通称リピート法が最も頻繁に用いられている。ところが、近年の音声教育研究の成果から、何度リピートをしてでも発音が直りにくい場合があることが明らかになった（河野・松崎 1998）。そのため、発音指導を効率よくするには、教師が一方的にモデル音声を提示し、ただリピートをさせるのではなく、指導方法を工夫する必要がある。さらに、教室内での指導だけでなく、学習者には今後も継続的に発音を学習していけるように学習方法を指導し、実践させることが重要である。

復旦大学のコースではシャドーイング練習法と音響分析ソフトを用いた音声視覚法⁴をメインとして実践してきた。(1) シャドーイング練習法を紹介し、学習者にその方法を理解してもらう。授業ではまず音声項目に関連する規則や解説をする。次に朗読練習の際にシャドーイング練習法を実践している。使用する素材は日本語母語話者による朗読音声で、録音時間は毎回約2分である。以下はコースの第15週（ポーズ）で用いたシャドーイングの内容である（表2）。この課では、まずポーズの定義や機能について説明をする。次にポーズに注意しながらシャドーイング練習を実践している。

表2 第15週のシャドーイングの内容

【練習】

1. 以下の文章を聞いてください。ポーズ（●）に注意しながら、シャドーイングしてみましょう。

十二月になると●あちこちで忘年会の準備が始まる。●●景気のいいときは●忘年会のあと●二次会、●三次会と飲み続け、●電車がなくなって●タクシーで帰るサラリーマンもいた。●●だが、●このごろは景気がよくないので、●忘年会の予算も縮小する会社が多くなった。●●

飲食店やホテルなどは、●客を集めるために●いろいろな工夫をする。●●平日や昼間は割引をする、●人数が多ければ割引をする、●カラオケの機械を無料で貸す、●くじに当たれば●ホテルの宿泊券を出すなど。●●温泉旅館も忘年会を売り込む。●●温泉に入ると●疲れがとれるし、●飲みすぎても●すぐに帰って寝られるからいいと●旅館側は宣伝する。●●

しかし最近、●職場単位の忘年会は減る傾向にあるという。●●気の合った友達や同僚など数人のグループで●会を開く傾向が出てきた。●●また、●料理の配達を頼んで●家でパーティーをする人が多くなった。●●以前は忘年会の時期になると●飲めない人は無理に飲まされる心配をしたり、●幹事をやらされる心配をしたり、●隠し芸の練習をするなど、●会社員はいろいろな苦労があったようだ。●●職場中心主義が薄れたことや●景気のよくないことは、●こうした人たちにはありがたいことだろう。

縮小：しゅくしょう 職場単位：しょくばたんい 幹事：かんじ 隠し芸：かくしげい

中心主義：ちゅうしんしゅぎ 薄れた：うすれた

『日本語ジャーナル』2001年12月号より引用した。

シャドーイングを行なう前に、学習者各自に、原稿を見ながら辞書を調べたりして何回か読む練習をしてもらっている。また、メディア教室（図2）で SANAKO Lab 100⁵（図3）というシステムを用いて、シャドーイング時の音声を録音する。学習者の人数が多いため、授業では学習者全員にコメントするのではなく、教師は必要に応じてシャドーイング

のフィードバックを行なう。授業後、学内の e-Learning システムを通して、録音した音声进行学习者に配布し、モデル音声と比較してもらっている。ただ、図2のようにメディア教室でシャドーイングを行なう場合は、学習者の音声をいっぺんに録音できるという利便性はあるが、となりの学習者の発音など騒音があるため、音響分析できる録音環境ではないのである。



図2 SANAKO Lab 100 言語学習実験教室

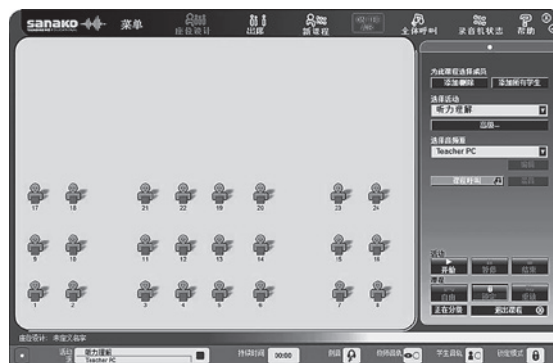


図3 SANAKO Lab 100 システムの操作画面

(2) 韻律指導の際に、音響分析ソフト Praat を用いて指導している。韻律情報は人間の聴覚印象によって表記できる。しかし、目に見えないし、手で触れることもできないため、教師にとっても学習者にとっても捉えにくい項目とされてきた。本コースにおいて、リズム、アクセント、イントネーションの課では音響分析ソフトを導入し、音声を視覚的に学習者に見せる方法を実践してきた。第11週あたりに、学習者にパソコンを教室に持ち込んでもらって、Praat を使った実習を行なう。具体的な内容は① Praat を使った録音、再生と保存、② 音声ファイルの解読方法（持続時間やピッチ曲線など）、③ Praat を使った発音学習（促音の時間の計測、ピッチ曲線の比較）である。まずは音響分析ソフトの操作に慣れて、次に各自テーマを決めて、音響分析を試みる。最後にその過程と成果をレポートにまとめて、期末に提出する。このように音声の物理的要素を視覚的に提示することで、長さや高さ、その変化を客観的に観察し、理解することができるようになり、今後の自律

学習にもつながると考えている。

3.2.3 発音のモニター力の育成

言語の学習ストラテジーの有効性について、自己評価、自己モニターが言語学習全体に対して効果的であると言われている（Wenden 1991）。劉（2012）の調査結果から、発音上位群のほうが「自己評価型ストラテジー」の使用頻度が高いことがわかった。つまり、上位群学習者のほうが自分の発音について考え、評価しながら学習しているのである。自然な音声情報のインプットだけでなく、学習者自身の目標言語使用（アウトプット）をモニターすることによって、学習者が言語知識をコントロールすることを可能にし、よりよい言語習得が実現できるようになると考えられている。

このコースではモニター力の育成に力を入れてきた。まず、メディア教室で SANAKO Lab 100 というシステムを用いて、シャドーイング時の音声を録音し、学習者自身に聞いてモデル音声と比較してもらっている。それから、学期末のスピーチ大会では、学習者に相互評価させ、他人の発音を意識的に聞くチャンスを提供した。相互評価の項目は単語、リズム、アクセント、イントネーション、話す内容や姿勢などに分けられている。自分の発音ばかりでなく、学習者同士の発音も意識的に聞くことで、モニター力の育成を精力的に行なっている。自律学習に繋げていくためには、教師が着目すべき学習項目に焦点を当て、学習者自身やほかの学習者の発音について考えさせる機会を与え、モニター力の育成を行なうことが大切ではないかと考えている。

3.3 教材開発

音声教育の一環として、このコースのシラバスにそって、音声教材『日語語音学教程』の開発を試みた。音声教育の理論研究と発音実践の融合を目指し、音声学の概念および音韻規則の導入のほか、さまざまな練習コーナーを盛り込み、メリハリのある発音学習ができるように工夫している。教材は6つの章から構成されていて、使用言語は日本語である。目次は以下のとおりである。

表3 『日語語音学教程』目次

第1章	日本語の音
第2章	日本語のリズム
第3章	日本語の話し言葉の音声特徴
第4章	日本語のアクセント
第5章	日本語の外来語の音声特徴
第6章	日本語のイントネーション
付録1	音声分析ソフト Praat の使用方法
付録2	動詞活用形のアクセント表（3拍語）
付録3	数詞1～100のアクセント表
付録4	助数詞のアクセント表
	参考解答
	参考文献
	用語索引

各章の構成は次のとおりである。

1. 【学習目標】
2. 【考えてみよう】
3. 【解説】
4. 【練習】
5. 【コラム】
6. 【ゲーム】

【学習目標】では、各章の学習内容と目標について述べ、【考えてみよう】では、ウォーミングアップとして各章の学習内容について実例を挙げる。【解説】では、各章の重要概念、発音方法などについて説明し、【練習】では、各章で導入される学習内容に関係するタスクを与える。【コラム】は必要に応じて追加する項目で、母語である中国語の音韻規則と比較し、その差異を理解してもらう。各章の最後に学習内容に関連する【ゲーム】を教室活動の一環として提案してある。

3.4 アンケートの結果

コース終了時に履修者を対象としたアンケートを実施している。対象者はコース履修者60名、回収率100%である。内容は発音コースの履修時期や学んだ音声項目や発音方法、コースへのアドバイスなどである。調査した結果、「このコースを通して、何を学びましたか」という質問に対し、「自然な発音」(85.5%)、「発音の学習方法」(70.1%)、「音響分析ソフトの利用方法」(68.0%)という回答が上位を占めていることがわかった。学んだことについて、具体的に記述してもらったところ、以下のようなコメントがあった(アンケートの使用言語は中国語で、筆者が日本語に翻訳した)。

表4 学習者からのコメント

単音に関して	「有声破裂音の発音方法を使って、発音できるようになりました」、「特に『フ』の発音ができるようになりました」、「擬音語と擬態語の有声・無声ペアが意味の違いにも関係していることを学びました」など。
リズムに関して	「リズムのことが一番勉強になりました。私の場合は緊張すると一気にしゃべりたくなるのですから」、「リズムについて勉強しました。自己流川柳も作れるようになりました」など。
アクセントに関して	「動詞、形容詞活用形のアクセントについては、規則があることを知りました」、「日本人の名前のアクセントにも規則が存在しているなんて、私が思っているイメージが覆されました」、「自分の日本語アクセントの間違いに気付きました」、「アクセントの部分がもっとも弱いので、勉強になりました」など。
イントネーションに関して	「文末イントネーションによって、いろいろな気持ちを表すことができるなんて、驚きました」、「はじめはイントネーションがよくわからなかったが、コースを通してわかるようになりました」など。

発音の学習方法に関して	「Praatを使って、自分と他人の発音を目で比較することができて、楽しいです」、「ペアで発音の練習をすることで、自分と他人の発音の違いに気づくようになりました」、「音響分析ソフトを使うと、今後自分でも発音を学習することができるようになります」、「発音練習にはシャドーイングが一番いい方法だと思います。今後もニュースやドラマなどのシャドーイングをやってみたいです」、「手や体の動きを使った発音練習方法を学びました」など。
その他	「このコースでは日本語の発音について体系的に学ぶことができました」、「スピーチ大会の練習や発表を通して、みんなの前でも自信を持って日本語を話すことができました」、「発音にもルールがあることを気づかせてくれました」、「発音はわたしにとって本当に未知の世界で、内容が面白かったです」、「このコースを通して、普段の朗読や会話でも発音に気をつけるようになりました」、「長年正しいと思っている発音が本当は不自然な発音でした。それを気づかせてくれました」など。

また、このコースはカリキュラムの制限の関係で、2年生を対象に行なっているが、ほとんどの履修者はもっと早い段階から発音の指導を受けたいと述べている。そこからも学習ニーズの高さ、そして初期に発音指導を行なう必要性が窺える。さらに「このコースへのアドバイス」について、以下のような意見が寄せられた。「2年生にとっては単音の指導はあまり役に立たない気がしています。もっと早い段階で指導してほしいです」、「シャドーイング練習の内容をもっと豊富にして、量も増やしてほしいです」、「有声・無声破裂音の練習をもっと増やしてほしいです」、「授業中に体験型活動を増やしてほしいです」、「先生にも我々の練習活動に参加してほしいです」、「毎週違うメンバーとペアを組んで、練習してみたいです。お互いに学び合うこともありますから」、「学生たちに情報や事例収集をさせてもいいかもしれません」、「発音に関する教材や資料などがあったら、紹介してほしいです」、「ソフトの使用分析方法を詳しく指導してほしいです」などである。今後は学習者からのアドバイスも取り入れて、コースの改善を試みるつもりである。

4. 中国における日本語音声教育の課題と展望

中国における日本語音声教育の現状を振り返り、各教育機関で取組みを重ねてきているとはいえ、まだ多くの課題が残されている。劉（2011、2012）のアンケート調査の結果では、音声指導が必要であると現場の教師が認識していることがわかった。しかし、音声指導は入門の初期に集中して行なわれており、継続的な指導がないこともアンケート調査の結果からわかっている。その結果、発音指導を学習初期に受けたにもかかわらず、教室を出たら発音が指導前に戻ってしまったりすることは少なくない。また小河原（1993）では、日本語母語話者が外国人日本語学習者の発音に対する評価はその日本語能力によって異なり、学習者の発音が下手なうちは許容されるが、学習が進み、発音がうまくなるにつれて評価は厳しくなることが報告されている。実際、継続的な発音指導を受けていない学習者の場合は、日本語のレベルが上級になっても、発音の問題がそのまま残っていることも教育現場でしばしば目にする。したがって、中国における日本語教育の現場でも、計画的か

つ継続的な音声教育の実施が急務であろう。

ところが、発音コースを開設すればすべてが解決できるというわけでもない。谷口(1991)の調査では、日本語教師にとって、音声指導は最も苦手な分野の一つであることがわかっている。劉(2012)の教師対象のインタビューでも、教師から「自分も十分理解しきれていない」、「教え方がよくわからない、自信がない」などのコメントが得られている。しかし、学習者個人から、あるいは教育機関から発音指導のニーズがある以上、教師側に指導技術が求められることは言うまでもない。特に、教室内の発音指導において教師が指導方法を工夫して、効率的に発音学習を支援することには意義がある。単にお手本としてのモデル音声を提供して、リピートさせることだけでなく、母語・母方言の影響を受けやすく習得しにくい音声的側面に焦点を当て、適切な指導を行なうことが不可欠である。その場合、母方言などの諸要因の影響を受けた学習者の発音に向き合う教師は、学習者の不自然な発音の原因を突き止め、対策を講じなければならない。個々の学習者を指導できる教師の力、モデル音声になるような教師の発音が教室場面では求められている。そのような力を育てる教師養成が必要とされている。

それ以外にも、今後中国における日本語音声教育をさらに展開していくには、以下のようなことが考えられる。まず、発音練習のための学習リソースを提供するために、授業での対面式教授スタイルだけでなく、e-Learningの活用やオンデマンド授業の可能性も考えられる。そして数多くの学習者のケアを考慮すると、海外の教育機関との提携やメンターシステムの導入などもさらに探る必要があるだろう。

5. おわりに

本論文は中国における日本語音声教育の現状について述べ、学習者の学習ニーズの高さ、そのような学習者を取り巻く音声教育の実態が明らかになった。また復旦大学における日本語音声教育の取組みについて、その到達目標、概要、教材開発、アンケート調査の結果について報告した。このコースでは、学習者の学習ニーズに応えられるように、1) 母語との差異の理解、2) 発音の学習方法の指導、3) 発音のモニター力の育成の3点を考慮して授業を展開してきた。最後に、まだ残されている課題を提示し、今後の発展可能性について述べた。本論文で得られた知見を共有し、今後も研究と実践の積み重ねを通して、中国における日本語音声教育に貢献できるよう真剣に取り組んでいきたい。

注

- 1 りゅう・かき(復旦大学外国語文学学院・専任講師)
- 2 中国の大学の場合は、日本語の発音コースが少なく、総合や会話の授業で発音指導を同時に行なっていることが多い。またあるとしても学校の規定による取得単位の上限があるため、選択できない可能性もある。
- 3 上海方言の破裂音は、中国共通語の有気・無気破裂音のほかに、有声破裂音も存在している(劉2005)。
- 4 音響分析ソフトを用いて音声を視覚的に学習者に見せる方法である。

- 5 2006年にフィンランドのSANAKO社によって開発された高音質の言語学習実験教室である。言語学習の基礎練習のほか、聴解テストや同時通訳などの機能も備えている。また、録音の場合は、学習者の音声データが備え付けのパソコンに保存されるようになっている。

参考文献

- 小河原義朗 (1993) 「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」『東北大学文学部日本語学科論集』3 東北大学文学部日本語学科、pp. 1-13
- 川口義一 (2008) 「VT (ヴェルボ・トナル) 法による日本語音声指導」『日本語教育と音声』(戸田貴子編著) くろしお出版、pp. 117-138
- 河野俊之・松崎寛 (1998) 「一般日本人と日本語教師の音声評価の差異」『日本語教育方法研究会誌』5-2 日本語教育方法研究会、pp. 24-25
- 崔春基 (1992) 「中国の日本語教育における音声教育の二三の新方策」『日本語音声の研究と日本語教育』日本語音声国際シンポジウム、pp. 279-281
- 谷口聡人 (1991) 「音声教育の現状と問題点—アンケート調査の結果について—」『シンポジウム日本語音声教育・韻律の研究と教育をめぐる』(水谷修・鮎澤孝子編著) 凡人社、pp. 20-25
- 劉佳琦 (2005) 「中国(北方・上海)方言話者による日本語有声・無声破裂音の知覚に関する一考察—初級学習者を対象として—」『早稲田大学日本語教育研究』6 早稲田大学大学院日本語教育研究科、pp. 79-90
- (2011) 『日本語有声・無声破裂音の習得及び教育』新星出版社
- (2012) 『日本語の動詞アクセントの習得』早稲田大学出版部
- Major, R.C. and E. Kim (1996) "The similarity differential rate hypothesis", *Language Learning* Vol. 49 pp. 465-496
- Wenden, A. (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy* Englewood Cliffs. NJ: Prentice-Hall
- 段育文 (2008) 《日语发音全解》世界图书出版公司
- 戸田貴子 (2010) 《让你沟通自如的日语发音课本》世界图书出版公司
- 凌蓉 (2009) 《日语语音教程》上海外语教育出版社
- 刘佳琦 (印刷中) 《日语语音学教程》华东师范大学出版社
- 谢为集 (2006) 《日语的发音与声调》北京大学出版社
- 由志慎 (2006) 《标准日语发音》大连理工大学出版社
- 翟冬娜・林洪 (2000) 《日语发音与纠音》北京大学出版社
- 张升余・南海 (2007) 《零起点掌握标准日本语发音》世界图书出版公司
- 赵秀娟 (2003) 《掌握日语发音》世界图书出版公司

* 本研究は「中国中央高校基本科研業務プロジェクト(課題番号: 20520132089)」および「教育部人文社会科学青年項目(課題番号: 11YJC740065)」の助成を受けている。